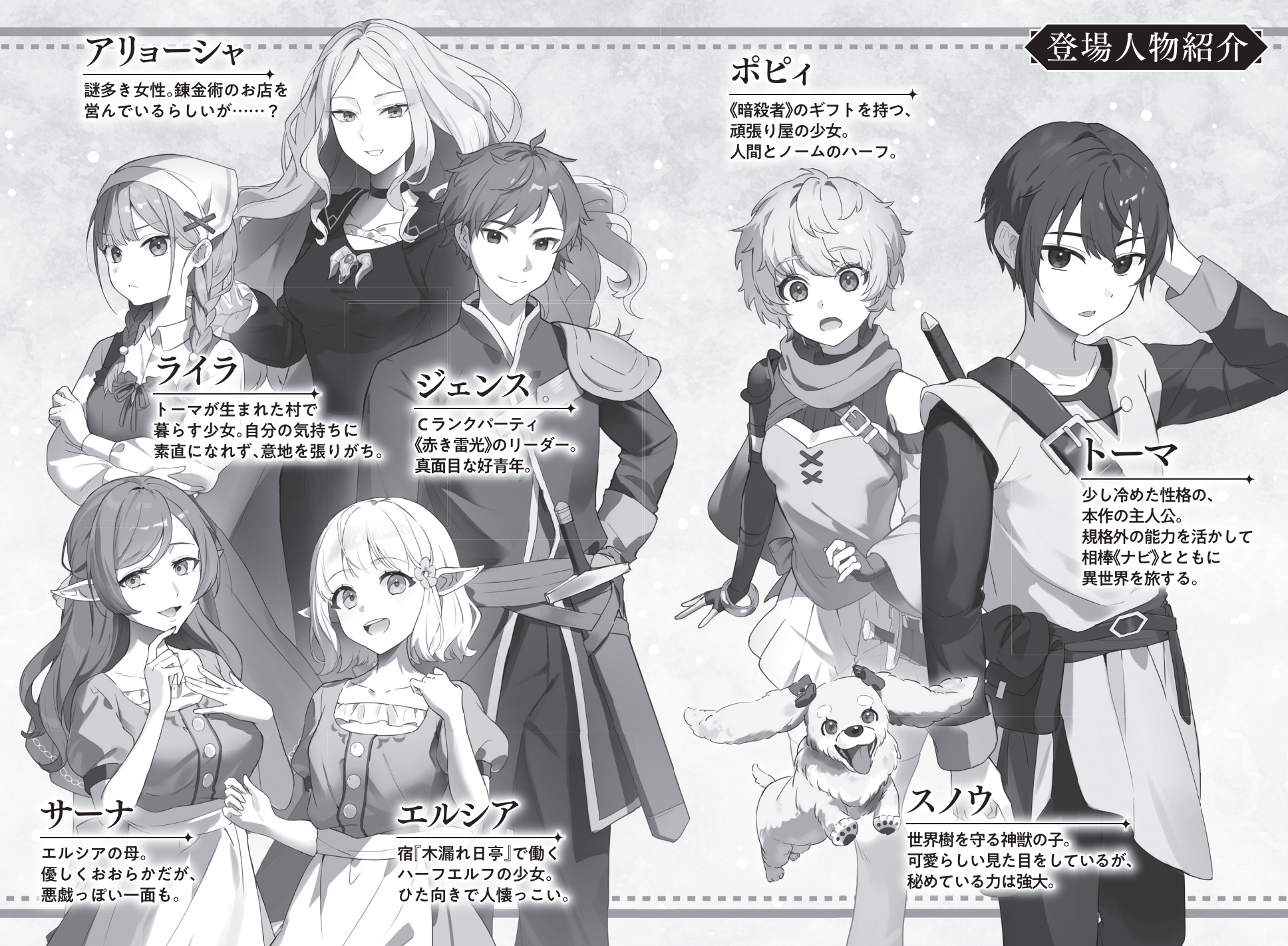
少し冷めた
SUKOSHI SAMETA MURABITO
村人少年の
SYONEN NO BOUKENKI
冒険記
AUTHOR
mizuno sei
Illustration: Akaike

登場人物紹介



アリョーシャ

謎多き女性。錬金術のお店を
営んでいるらしいが……？

ポピィ

《暗殺者》のギフトを持つ、
頑張り屋の少女。
人間とノームのハーフ。

ライラ

トーマが生まれた村で
暮らす少女。自分の気持ちに
素直になれず、意地を張りがち。

ジェンス

Cランクパーティ
《赤き雷光》のリーダー。
真面目な好青年。

トーマ

少し冷めた性格の、
本作の主人公。
規格外の能力を活かして
相棒《ナビ》とともに
異世界を旅する。

サーナ

エルシアの母。
優しくおおらかだが、
悪戯っぽい一面も。

エルシア

宿『木漏れ日亭』で働く
ハーフエルフの少女。
ひた向きで人懐っこい。

スノウ

世界樹を守る神獣の子。
可愛らしい見た目をしているが、
秘めている力は強大。

はじまり

「ああ、もう十時すぎか……早いとここいつを片付けて帰らないと……」

そうつぶやいて、コーヒーを淹れ直すために椅子から立ち上がった。

俺はモチヅキコウキ、二十八歳。

今日も今日とて会社で居残り残業だ。

大学時代の友人に懇願されて、勤めていた会社を辞め、彼が立ち上げたベンチャー企業に再就職したのだが、この二年間は、ブラックすぎる日々だった。

俺の仕事は、コンピューターのシステムエンジニア。

とはいえ仕事は、その枠に収まらないほど多岐にわたる。入社して早々に会社立ち上げから、社内のシステム構築、セキュリティ対策、おまけに顧客からの苦情対応までやらされる羽目になった。

システムが完成しても、社内、社外でのガイダンス、説明会、日々のメンテナンス、セキュリ

ティの緊急対応、そして苦情への対応……息つく暇もないほどだった。
おかげで俺の心と体は、知らぬ間に取り返しのつかない状態になり、気づけば死の沼へと歩を進めていたのである。
熱いコーヒーを一口すすり、さあ、もう一仕事、と椅子に座ったとたん、目の前のディスプレイがぼやけ、文字がゆがんだ。
あれっと思い、目をこすってもう一度画面を見ようとした途端、意識が遠のいていき、俺は椅子から床へ崩れ落ちた。
遠のく意識の中で、これまでの二十八年の人生が編集されたビデオのように、その時の感情と共によみがえって来た。
（俺、このまま死ぬのかな……ああ、父さん、母さん、それほど余裕のない生活の中で、大学まで出してくれて……恩返しもできないままで、ごめんな……妹のカズミ、小さい頃はよくなついてくれて……もっと遊んで、可愛がってやればよかったな……今では、うざったがられて、よそよそしくなったけど……）
感謝の気持ちの後に押し寄せる、後悔の思い。
思い出の再生はまだ続いた。
（ああ、幼なじみで親友だったNか……中学まではよく一緒に遊んだな……それから、小学校、中

学校の思い出……と……えっ、もう高校？　早くね？　あらら、大学はそんだけ？　……何か……俺の人生って、薄っ！　ま、まあ、確かにさしたることもなかったし、とにかく早く一人前になって親を安心させたくて、必死に勉強する毎日だったからな……ところで、まだ天国に行かないのか？　俺、本当に死ぬのか？）
そんな疑念が浮かんだ直後、突然世界がフェードアウトする。

気がつくと、俺は真っ白な何もない空間にぽつんと座っていた。
（おお、やっと天国らしき場所に来たな……てか、何もないな……アニメやラノベでは、ここで神様が出てきて、何か、君はまだ死ぬはずじゃなかった、スマン、とか謝って、お詫びにすごい能力を授けて転生させてあげよう、とか言ってさ、魔法が使える世界に転生させてくれるんだよな……うん、俺もきっとそうなるはずだ、まだ二十八だったからな……もう、そろそろ出て来るはずだ……もう、そろそろ……だよな……）
……
……
……
（……？　おーい、まだか？　……神様？　おーい……ん？　うおっ、あああぁぁ……）

体感（体はなかったが）で三十分くらい経った時だったと思う。
何の変化もないことに急に不安を覚え始めた時、突然、俺は排水口へ流れる水のように、どこかへ一気に引っ張られていった。
そして、忘れもしない、衝撃的な瞬間を迎えたのだ。
『ご生誕、おめでとうございます、マイマスター』
誰かが俺に語りかける。
「ほぎゃっ！　ほ、ほぎゃ～、ほぎゃ～～……（え？　な、何だ？　何が起こった？）」
「おお、男の子だ。よく頑張ったな、マリア」
「はい、あなた……よしよし、さあおいで、愛しい坊や……」
マリアと呼ばれた女性は、俺に乳を飲ませてくれる。
「むぎゃ……んぐ……んぐ……うむぎゃふう……（何？　……んぐ……んぐ……そんなことが……まじか？　俺、転生したの？）」
『……はい。そういうわけです。これからマスターのために誠心誠意お仕えいたしますので、どうぞよろしくお願いします』
夫婦らしき二人とは、明らかに違う声だ。
（んぐ……んぐ……って、誰だよ、お前は？）

『私は《ナビゲーションシステム》、ナビとお呼びください。優秀で心強いマスターの相棒ですよ』
（自分で言うか？　……まあ、何か怒涛の展開でよく分からんが、よろしく頼む）
『はい、どうかこのナビにお任せください』
というわけで、俺のハチャメチャな転生人生が始まったのである。

◇　◇　◇

「フッ、フッ、ホッ、ホッ……」
静かな朝の清涼な空気の中に、俺の息遣いだけが響く。
他に聞こえるのは、小鳥のさえずりだけだ。
トーマ、それがこの世界に転生した俺の名前だ。例の衝撃的な転生の日から、ちょうど十年がすぎた。
俺の新しい故郷となったこの場所は、ラトス村という、周囲を山に囲まれた辺境の小さな村だ。
のどか、と言えば聞こえはいいが、つまり農業、牧畜、狩猟以外には何も産業がない、貧しい村である。
だが、この世界の村はどこも似たり寄ったりで、ラトス村はむしろ裕福な方らしい。つまりこの

世界は、地球の歴史で言えば、古代から中世になったばかり、といったところなのだ。
今、俺は村の周囲を七周ほど走り終え、村の外れの空き地でストレッチを始めたところだ。
ストレッチを入念に約十五分ほどやると、今度は二メートルほどの木の棒をブン、ブンと音を立てて振り始める。
それを、約二十分続ける。
これが、俺の毎朝の日課である。暑い日も寒い日も、雨の日も風の日も、それを休むことなく淡々とやり続けている。

俺が朝の日課を終えて、共同井戸の側で顔を洗い、汗を拭き始める頃、ようやく村は目覚め始める。
俺の密かな鍛錬を知る者は、家族以外にはほとんどいない。
『ほとんど』というのは、例外として一人だけ、毎日のように俺の鍛錬を遠くから見つめているやつがいるからだ。
「あんた、また無駄なことやってんの？」
鍛錬を終えて家に帰ろうとしていると、飼い葉桶を抱えたまま、そいつが馬小屋の陰からつかつかと近づいて来て、いつもの言葉をぶつけて来た。

俺もいつものように無視して歩き出す。
「待ちなさいよ。何度言ったら分かるの？　あんたは〝はずれギフト〟なのよ」
「知っている」
「どんなに頑張っても無駄なの！」
「……無駄かどうか、やってみないと分からない」
「無駄よっ！　無駄、無駄……あんたはこの村で畑を耕すか、家畜を飼って暮らすしかないのよ」
そいつ――この村の村長の孫娘で俺と同い年のライラは、そう言い捨てると肩を怒らせながら自分の家の方へと去って行った。
なぜ彼女が怒るのか、俺にはまったく理解できなかったが、馬鹿にされた不快感だけが残る。だが、いつものことなので、小さくため息を吐いただけで我が家への帰途に就いた。
「ギフトか……」
俺は小さくつぶやいて、もう一度ため息を吐いた。
そう、この世界の人間には生まれた時に『神』から『ギフト』なるものを与えられる。
どんなギフトが与えられたか判明するのは、五歳の誕生日に教会で行われる《ギフト降授の儀》の時だ。
ギフトには大雑把に分けて、武闘系、生産系、技術系、その他の四種類がある。

人は、その与えられたギフトに従って職業を決め、生きていく。それを疑問に思う人間はほとんどいない。
なぜなら、ギフトはだいたいその家の代々の職業を引き継ぐようなものが与えられるからだ。
たとえば、農民の子には生産系の《栽培》《牧畜》や開墾などにとても有益な《土魔法》などのギフトが与えられる。
ギフトに従って生きる。
それが当たり前で一番幸せなのだ、と誰も疑わない。
俺もそれには概ね同意だ。『神が考えた効率的な運用システム』なのだ……と捉えている。
しかし俺は、確信を持って他の人間たちより一歩踏み込んだ〝真実〟を理解している。
俺は前世で、とある会社のシステムエンジニアだった。
だからこそ、この世界を創った神の意図を読み取れた。
この世界では、時折よく分からないバグのようなギフトが発現する。
『はずれギフト』と呼ばれるそれを授かった子供は、不要な人間であるとの烙印を押され、一生その呪縛から逃れられない。
だが、はずれギフトは予想外のエラーなどでは決してない。
〝小さな事故〟を意図的に発生させ、世界を変化あるいは進化させるきっかけとしようという、神

の意思が顕現したものなのだ。
本来、授かるギフトは家業に関わるものになることがほとんどだが、時折、全く別種のものになることがある。
当然、親は困惑する。しかし、神の意図を無視するわけにもいかない。
そこでなんとか子供を授かったギフトに見合うように育てようと頑張る。子供も神や両親の期待に応えようと努力するだろう。その結果、両親や子供の行動は、周囲に少なからず影響を与える。
いや、この場合、たいていは子供にギフト以上の大きな潜在能力が与えられているか、子供を成長させるイベントが用意されている。
はずれギフトは、その最たるもの。
神が世界に既定路線とは別の変化を起こすために授けた能力だ――と俺は解釈しているわけだ。

さて、そんなわけで、俺も五歳の時、自分に与えられたギフトを知った。
ところがそれは、両親をガッカリさせ、周囲の村人からは、それ以来さげすみの視線を浴びるきっかけとなるはずれギフト。
それ以来『できそこない』の『ごく潰し』人間――不要なゴミと見られるようになった。
ただ、はずれギフトを授かってもまだ裕福な商人や貴族の子供なら生きていくのにさほど困難はないだろう。しかし、村の貧しい農民の子はたいてい放り出されて野垂れ死ぬか、運がよくたって奴隷として売られるか、犯罪者や盗賊になって生き延びる程度の未来しか描けない。
ただ俺は、そんなギフトを授かったことで、強くなれた。

1　『はずれギフト』の正体

「『ナビ』？　司教様、それはいったいどんなギフトでしょうか？」
五歳のギフト降授の儀の日、父は司教に心配そうに尋ねた。
「ふうむ……正直言って分からぬ。この年まで長年降授の儀に立ち会って来たが、初めて見るギフトじゃ。いったい何じゃろうのう？」
年老いた司教はそう言うと、情けない顔の両親をよそに、ローブの内ポケットからメモ帳と炭筆（木炭と粘土を混ぜてスライムの液で固め、乾燥させた鉛筆のような筆記具）を取り出して、魔道具が映し出したギフト名をメモし始めた。

たぶん、珍しいギフトは、国に報告する義務があったのだろう。
何のギフトか分からない、ということは、つまりはずれギフトということである。両親は落胆し、村の連中から逃げるように俺を引っ張って家に帰った。
この日、俺の運命は決定した。
両親が何歳まで養ってくれるか分からないが、そう遠くない将来に、俺はこの家から出て行くことになるだろう。
なぜって？
それは、前にも述べたように、この世界が俺の記憶にある前世と比べて、遥かに厳しい世界だからだ。
前世の家もどちらかというと貧しかったが、今世の我が家の比ではない。
とにかく、家族が満足に食べていくことが、今の一家の至上命題なのだ。俺は前世で親孝行できなかった。
せめて、今回は自分にできることをしたい。
いや、それなら、この家に残り、森を切り開いて新しい農地を開墾するとか、作物の品種改良で生産性を上げるとか、他の方法で親孝行すべきだと言われるかもしれない。
確かに、それも考えた。しかし、森を切り開くためには、この村の領主であるレブロン辺境伯の

許可と土地取得税という名の、我が家からして多額のお金が必要なのだ。
また、品種改良は、農業の経験がなく、植物学の知識もない俺には厳しい。
何年かかるか分からないし、成功する保証もない（ナビの知識を使えばいい、ということはずっと後になって気づいた）。
それに、実はもう一つ、家を、というよりこの村を出たい理由が、俺にはある。
それは、今回の人生では、前世でできなかった〝自分の力で、自由に、好きなように〟人生を生きてみたい、という思いだ。
両親や家族には申し訳ないが、この思いを抑えることができなかった。
というわけで、俺は五歳の《ギフト降授の日》に、十歳になったら家を、この村を出て行こうと決心したのである。
でも、その後も両親は辛抱強く俺を育ててくれた。もしかすると、俺のギフトが農家にとって有用なギフトかもしれない、という期待があったのだろう。三つ年上の兄と二つ年下の妹と何の差別もなく、愛情を注いでくれた。
俺は心の中で両親に深く感謝し、そして申し訳ない気持ちで日々暮らしていた。
なぜ、申し訳ない気持ちになったかって？
それは、俺はこの時点ですでに《ナビ》というギフトが農業には役に立たずとも有用だと、知っ

ていたからね。

◇　◇　◇

『女心というものは、複雑ですね、マスター？』
（は？　お前、突然何を言い出すんだ？）
家に帰る道すがら、俺は頭の中に聞こえて来る声に、頭の中で答えた。
ナビは俺専用のナビゲーションシステム。
こいつは俺が生まれてすぐに起動し、それから俺の話し相手になったりアドバイスをくれたりする。
（それで、女心って、誰の話だ？）
『それはもちろん、ライラさんのことですよ』
（はあ？　……あのくそガキの女心？　そりゃ分からんわ。複雑？　んなわけあるかっ！　あいつは単純に俺を馬鹿にしているだけだ。それ以上でもそれ以下でもない。以上）
『……マスターの恋愛経験の少なさに、ものの哀れを感じます』
（うるせー、ほっとけ）

「おはよう、トーマ。今日も鍛錬かい？」
俺が家に帰り着いて、汗を拭くために裏庭の井戸へ向かうと、ちょうど顔を洗い終えた人物が、タオルで水気を拭きながらにこやかに声を掛けて来た。
このさわやかイケメンが、俺の三つ上の兄のリュートだ。
薄い色の金髪に碧眼、通った鼻筋……男の俺でも惚れ惚れするようないい男だ。
しかも、性格も優しく、真面目で、責任感が強い。
うん、主人公だね。物語なら完璧に王子様役だ。ただ、残念なことに、兄のギフトは『品種改良』、完全に農民仕様なのだ。
「ん？　僕の顔に何かついているのか？　そんなまじまじと見つめて……」
「あ、ああ、いや。おはよう、兄さん。今日もいい男だね」
「な……お、男のお前に言われても、う、嬉しくなんかないぞ」
そう言いながらも、目を逸らして赤くなる兄さん。うん、チョロすぎて将来が少し心配だ。
家族そろっての朝食（いつもの如く、ライ麦パンに野菜スープ）が終わると、全員で今日の仕事に出かける。
両親と兄は野菜畑で収穫と除草作業をしている。

我が家では、二アールほどの畑で五種類ほどの野菜を作り、家で消費する以外の余剰分を三日に一度、村の共同市場に卸している。

三日以内に売り切れるくらいの量だ。

それ以外には、月に一度訪れる商人に必要とされる分だけ売っている。現金収入はその二つの分だけだ。まあ、それでも、一家五人が何とか食べていけるくらいにはある。

まだ八歳の妹は、畑の側で近所の同じ年頃の女の子たちとおしゃべりしたり、ままごと遊びをやったりしている。で、俺はというと、村の周囲を巡回しながら、畑に害を与える魔物や害虫の退治が日課だ。

2　スキルの話

村の周囲の巡回は、村の男たちにとって大切な仕事だ。この役目は、主に『武術系ギフト』や『魔法系ギフト』を授かった者たちの役目となるが、俺のような『はずれギフト』の者たちも何人か加わっている。

「よし、じゃあ集まってくれ。グループ分けはいつもの通りだが、今日は北側にスライムの大量発生が確認された。そこで、一班から三班までは俺と一緒に北側の駆除に当たってくれ。残りの四班から六班まではいつも通り東、南、西の順番で回ってくれ。じゃあ、出発」

てきぱきと指示を出している二十代後半の男性は、この村で狩人や魔物退治の仕事をやっている《ラトス自警団》の副団長ピレルさんだ。

『弓士』のギフトを持っていて、『大剣使い』のギフトを持つ団長のクレイグさんと共に、村の少年たちの憧れの的だ。

俺は四班なので、五人の班の人たちと一緒に東に向かって歩き出した。

俺の武器は直径約六センチ、長さ二メートルの硬い木の先を削って尖らせたもの、簡単に言うと細長い木の杭のようなものだ。

これで叩いたり、突いたりして敵を倒す。

まあ、立派な金属製の武器に比べると粗末なものだが、俺の戦い方にはピッタリだ。

「よお、はずれギフト、今日も来たのか」

……で、このウザいやつが、アント。俺より一つ年上で、村で一番大きな農家の息子だ。『剣士』のギフトを持っていて、いつも数人の取り巻きに囲まれ威張り散らしているガキ大将だ。

「……」
俺は基本、こういう手合いは無視することにしている。関わると面倒くさいし、いいことなんか一つもないからな。
だが、アントのやつは何かというと俺に突っかかって来る。
ほんと、ウザいやつだ。
『その理由に気づかないマスターは、ほんとに〝鈍ちん〟ですけどね……』
（ん？　何か言ったか？）
『いいえ、何でもありません』
何やら含みのある物言いに頭の中にはてなマークを浮かべていると、なおもアントが突っかかって来る。
「おい、何シカトしてんだよ。生意気なんだよ、〝はずれ〟のくせしやがって」
アントが俺の肩をつかんできたので、俺はそれを振り払うと、早足で班のリーダーであるダンさんの側に向かった。
「ん、どうした、トーマ？　……ああ、そういうことか。おい、アント、お前五班だろう？　班に戻れ。それと、あんまりトーマをいじめるな。いいな？」
ダンさんはまだ十八の若者だが、『槍士』のギフトを持ち、リーダーシップもあり真面目な好青年だ。
「ちっ……卑怯者が……」
アントは舌打ちしながら、口の中で捨て台詞を吐いて、仕方なく自分の班に戻っていった。
「何であいつ、トーマにばかり突っかかるんだろうな？」
「さあ……たぶん、俺がはずれだからじゃないですか？　人間て、弱い者いじめが好きですからね」
俺の冷めた言葉に、ダンさんは苦笑した。
「あはは……お前、ほんと十歳らしくないよな。だが、そんな子供のうちから世の中を斜に見たような考えはやめた方がいい。現に、お前はその年で魔物とやり合える力を持ってるじゃないか。その力で、十分世の中の役に立てる人間になれるはずだ」
そう、ダンさんが言うように、俺はこの班の中で一番年下だが、魔物退治はダンさんに次ぐくらいの実績を上げている。
なぜ、そんなことができるのか。それは『スキル』のおかげだ。
この世界には、ギフトと同時にスキルというものが存在する。
ギフトは先天的に与えられた恩恵であり、『生きる方向性』のようなものだ。それに対して、スキルはその名の通り、後天的に身に付く技術で、『生きる上での補助能力』と言える。

当然の如く、スキルはギフトの影響を受ける。
つまり、ギフトに関係するスキルは獲得しやすい。
たとえば、《剣士》は《薙ぎ払い》《刺突》……などのスキルが得やすい。
やがて、それらのスキルがそろい、レベルが一定以上に達すると、《剣術》というスキルに統合される。
俺が毎日のように鍛錬している理由が、これで分かってもらえるだろう。そう、俺ははずれギフトを補うために、必死で《スキル》を身に付けようと頑張っているのだ。
ちなみに、これが今の俺のステータスと獲得しているスキルだ。

＊＊＊

【名　前】トーマ　Ｌｖ11
【種　族】人族（転生）
【性　別】♂
【年　齢】10
【体　力】１８６
【魔　力】１５５
【物理力】１０２
【知　力】２２８
【敏捷性】１６５
【器用さ】２２０
【　運　】64
【ギフト】ナビゲーションシステム
【称　号】異世界異能者
【スキル】
〈強化系〉身体強化Ｌｖ３　跳躍Ｌｖ２
〈攻撃系〉打撃Ｌｖ１　刺突Ｌｖ２
〈防御系〉物理耐性Ｌｖ１　精神耐性Ｌｖ２　索敵Ｌｖ２
〈その他〉鑑定Ｌｖ４　調合Ｌｖ１

＊＊＊

これは、一般の十歳の少年と比べてかなり高いステータスだ。いや、異常とすら言える。
ああ、ちなみに『【称号】異世界異能者』というのが何かはよく分からない。

ナビに聞いたが、『そのままの意味です』などと、埒が明かないことを言う。
意味は分かるが、それによってどういう影響があるかを聞きたいんだよな。
まあ、〈鑑定〉のランクが上がったら、詳細が見られるようになるらしいから、それまで待つとしよう。
ちなみに、あのいけ好かないアントのステータスとスキルはこんなものだ。

＊＊＊

【名　前】アント　Ｌｖ８
【種　族】人族
【性　別】♂
【年　齢】11
【体　力】83
【物理力】１０３
【魔　力】32
【知　力】45
【敏捷性】56

【器用さ】40
【　運　】55
【ギフト】剣士
【称　号】なし
【スキル】
〈強化系〉身体強化Ｌｖ１
〈攻撃系〉薙ぎ払いＬｖ２　刺突Ｌｖ１
〈防御系〉なし
〈その他〉恐喝Ｌｖ２

＊＊＊

これが、まあ普通、いや、〈恐喝〉なんていうスキルを身に付けている時点で普通ではないな。
まったく、十一歳の子供が恐喝なんてするなよ。
こんなふうに自分のステータスや、他人のステータスを見られるのは、ナビのおかげでもある。
というのも、〈鑑定〉のスキルは、『商人』や『探索者』というギフトを持つ者が、かなりの経験を積んでようやく獲得できるレアスキルなのだが、俺は生まれた時から持っていた。

どうやら、《ナビゲーションシステム》というギフトとセットのスキルらしい。
おっ！　……〈索敵〉に反応があった。かなりの数だ。
「ダンさん、左の森の中に何かいるっ！　数が多いから気をつけて」
「おうっ、了解だ。おおい、皆、獲物だ。左の森。ジーンとマルクは左右から回り込んで背後を突け。他の者は戦闘準備をして待機」
さて、一仕事やりますか。

3　旅立ちに向けて

その日、俺たち見回り組は、六つの班でスライムや大ネズミ、アーマードキャタピラーなどを合計五十六匹退治した。
一日の退治数としては多い方である。やはりスライムの大量発生があったからだ。その原因は、北側の山の斜面にできた『魔泉』だった。魔泉は地中をめぐる魔素の流れが何かの原因で分かれて、地上に噴き出したものらしい。
魔泉から噴き出す魔素は、やがて周囲の鉱物や生物に吸収され続けて結晶を形成する。
その結晶を体内に取り込んだり、体内で結晶が生成されたりした生物は『魔物』へと変異する。
スライムは魔素が結晶化した魔石を体内に生成したアメーバが変異したものだ。
魔泉は一応岩で塞いだが、一時的な処理にすぎない。
いずれ大きな街から、魔法使いを雇って来てもらい、結界石で封印してもらう必要があるとのことだ。
そして、その魔泉はあと何十年後か、あるいは何百年後かにダンジョンになるらしい。
魔泉が通り道の内部を迷宮化し、一番深い所に魔石＝コアが形成されたらダンジョンの完成だ。
ダンジョンはうまく管理すれば、お金を生み出してくれる貴重な存在。まあ、後の世代がうまくやってくれることを期待しよう。
「ほら、これは今日のトーマの取り分だ」
獲物の魔石は班ごとの退治数に応じて分配される。四班は大ネズミとアーマードキャタピラーを二十二匹退治した。班の六人で分けると一人三個と余りが四個になる。
ダンさんは、その余った分を全部俺に追加してくれた。

「え？　こんなにもらっていいの？」
「ああ、今日は……いや今日も、だな、トーマのおかげでたくさんの魔物を退治できた。そいつは正当な報酬だよ」
「ああ、遠慮すんな、トーマ。おかげで他の班の連中よりずいぶん儲けさせてもらっているからな」
「トーマ、また頼むぜ」
班の他の人たちも、俺が余った分をもらうのを文句を言わずに認めてくれた。
「ありがとう。じゃあ、遠慮なくもらっておくよ。じゃあ、また明日」
俺は班の人たちに手を振って、集会所を出て行った。

『魔石もずいぶんと貯まりましたね』
（うん……目標額まで、あと一週間もあれば貯まるな）
『いよいよですね』
（ああ、いよいよだ。予定通り、十歳で第二の人生のスタートだ）
村から約三百メートルほど離れた小高い丘に小さな林があり、その先に、村の命綱とも言うべき湖がある。

周囲の山々からの湧き水が溜まった湖で、その水は用水路を通って村の畑を潤し、家畜の飲み水にもなっている。
俺の秘密の隠れ家があるのが、この湖の側にある林の中なのだ。
大木の枝の間に板を組み合わせて作った小さな小屋。大風が吹けば吹き飛んでしまうような粗末な小屋だったが、幸い、作ってから三年、まだ壊れずにすんでいる。
入り口を含む三面は板壁で、もう一面は大木がそのまま壁になっている。その大木の壁には大きな洞が口を開けている。俺はここに自分の宝物を隠していた。
ロープで吊り下げた麻袋を引き上げ、中身を床に取り出して並べる。錆びて捨てられたナイフや美しい小石などのがらくたに交じって、大小様々な魔石が大量に積み重なっている。三年間こつこつと貯めて来た成果だ。
魔石の価格は多少の変動はあるが、ここにある分を売れば三十万ベル近くにはなるはずだ。目標はほぼ達成した。
ベルというのはこの世界のお金の単位だ。ちなみにすべて硬貨で、一円玉サイズの『小銅貨』が一ベル、日本円で換算すると十円くらいの価値である。
十円玉より少し大きいサイズの『大銅貨』が十ベル。つまり、簡単な十進法が採用されている。
『銀貨』が百ベル、千円くらいの価値だね。

そして、『金貨』が千ベル。日常でよく使われるのは、この金貨までだ。
この上に『大金貨』（一万ベル）、『竜金貨』（十万ベル）とかがあるけど、主に大きな取引や多額の褒賞金に使われるくらいだ。
さて、俺は一週間後、この村を出て旅に出る。そしてとりあえず近くの街まで行って、冒険者登録をし、装備を調える予定だ。ここまでが今の段階での計画。それから先は、たぶん冒険者の仕事をしながらなんとか食っていければいいと思っている。
（ん……っ！）
そんなことを考えていたら、〈索敵〉のスキルに反応があった。湖の近くだ。
『マスター、気づきましたか？』
（ああ、三匹、いや四匹か。大きいな）
俺は、急いで魔石を麻袋に戻し、洞の中に吊り下げた。そして、音を立てないように小屋から出て、大木の根元に身を潜めた。
「オークだな……何でこんな所に……」
この湖は村の共有地であり、一応魔物避けの結界石が周囲四か所に置いてある。普通なら近づけないはずなのだ。
『結界が十分機能していないようです。魔力切れか、もしくは何者かが結界石を持ち去ったか、そんなところでしょうか。それで、どうしますか？　討伐しますか？』
（……ナビさんや、中身はともかく、俺はまだ十歳の子供だぞ。オーク四匹を相手にできると思うか？）
『はい、できると思います』
（は？　簡単に言ってくれるね）
『ご自分でオークたちを〈鑑定〉された方が早いと思いますが』
（……あ……うん、できるな……）
ナビに言われて〈鑑定〉のスキルを使った俺は、納得した。
何せ、一番強い個体のステータスがこれなのである。

＊＊＊

【名　前】なし　Lv18
【種　族】オーク（亜人族）
【性　別】♂
【年　齢】25
【体　力】135

【物理力】 113
【魔　力】 20
【知　力】 33
【敏捷性】 86
【器用さ】 33
【　運　】 50
【ギフト】 なし
【称　号】 なし
【スキル】
〈強化系〉〈憤怒〉Lv4
〈攻撃系〉 薙ぎ払いLv2　強打Lv3
〈防御系〉 なし
〈その他〉 生殖(せいしょく)Lv2
＊＊＊

うん、アントとさほど変わらないな。アントはオークだったのか……。

まあ、冗談はさておき、油断さえしなければ、一匹ずつ確実に仕留めるやり方で殲滅(せんめつ)できそうだ。
「それにしても、あいつら俺よりレベルが高いのに、何でステータスは俺より低いんだ？」
『マスター、そろそろご自分が特別であることを認識された方がよろしいかと……』
(ん、ああ、まあ、確かに俺のステータスの上がり具合はおかしいと思うが……理由が分からん)
『異世界からの転生ということで、補正が掛かっていると思われます』
(ああ、つまりラノベの異世界ものとかでよくある『神の加護』ってやつか？)
『はい。マスターの場合はむしろ「神の謝罪」と言った方がいいかもしれません』
(は？　謝罪？　……)
ナビの口からまた突拍子(とっぴょうし)もない言葉が出て来たのであった。

4　初めてのオーク討伐

(謝罪？　どういうことだ？)

『まあ、その辺りの事情はおいおいご説明いたします。今は、とりあえず〝あれ〟を何とかしましょう』

（む……後でちゃんと説明してもらうからな）

俺はもやもやした気持ちを抱えながら、今、水を飲み終えて村の方角へ移動を始めたオークたちの方へ近づいていった。

ッ！　プギャッ……、プガギャ、プギャ、プギャ、プギャ……

突然、森の方から現れた人間の子供に、オークたちは驚いて、何やらプギャプギャと話していたが、やがていやらしい笑みを浮かべながらゆっくりと近づいて来た。

「ああ、お前ら、美味い餌が向こうからやって来た、とか思っているだろう？」

俺は愛用の木の杭を肩に、近づいて来るオークたちに言った。

「残念だったな。獲物はお前らのほうだっ！」

俺は、そう言うなり、一気にダッシュして一番前にいた一匹の喉に、木の杭を突き刺した。

ブガッ!!　グゥゥゥ……

弱小人間族の子供と侮っていたオークたちは、まったく油断しきっていた。俺は最初の一匹を倒すと、そのまま走り抜けて、村と反対の方向へ移動した。

あっけなく仲間を倒されて呆然としていた残りの三匹のオークたちは、ようやく我に返ると、背

後でニヤニヤしている俺を振り返った。

「ほらほら、どうした？　ここまで来てみろ」

俺は手で来い来いと煽ってから、わざと逃げにくい上りの斜面の方へゆっくりと移動した。

オークたちは興奮した声で喚きながら、地響きを立てて俺に迫って来た。

「おっと……あらよっと……そりゃっ！」

アジリティーの差というやつは、まったくありがたいものだ。

戦いにおいて、最も影響が大きいのは敏捷性、つまりアジリティーの差だと思う。少なくとも、回避力が高ければ負けることはない。

逃げればいいのだから。

俺とオークたちのアジリティーの差は約二倍だ。

彼らの動きが鈍く、とても分かりやすく見える。

俺は斜面を利用して、一気に近づけないオークたちに確実にダメージを与えていった。特に柔らかい部分を狙って突いていく。俺の武器は木の棒なので、頑丈なオークを叩くと折れる可能性が高い。だから、斧を振り上げたやつの脇や首、目などを徹底して突く。

やがて、一匹、また一匹と戦意を喪失して地面にうずくまる。

プギャーアアアッ！

ついに最後の一匹が、顎の下を突き刺されて倒れ込んだ。
俺は、倒れてもがくオークに、一匹ずつ確実にとどめを刺していった。
残酷？　ああ、そうだな、残酷だ。だが、その言葉は、ぬるま湯のような世界に生きているからこそ言える言葉だ。
俺が転生したこの世界は、生きるか死ぬかの厳しい世界だ。
生き残りたいから、容赦なく殺す。
そうしなければ、自分が死ぬだけだ。俺はこの世界で天寿を全うしたいから、必要ならばためらいなく殺す、それだけだ。
『初めてのオーク討伐、お疲れ様でした。そしておめでとうございます』
（ああ、ありがとう。さて、後始末をするか）
四匹のオークから魔石を抜き取ると、死体を一か所にまとめておく。後で自警団に知らせて、処理してもらおう。
その後、俺は湖の周囲の結界石を見に行った。
『やはり、魔力が枯渇していますね。新しい魔石に取り換えるか、あるいは……』
（だけど、新しい石に換えたら、また魔法を掛け直さないといけないんだろう？　魔法使いを雇うと結構お金がかかるって聞いたぞ）

『はい。それなら、もう一つの方法を試しましょう』
（もう一つの方法？）
『はい。マスターが魔石に魔力を注入すればよいのです』
（はああ？　そ、そんなこと……）
（できます）
俺は半信半疑ながら、ナビの指示に従って結界石に魔力を注ぎ込む実験を始めた。
『……はい、そうです。今、手に感じている抵抗感が、魔石に刻まれた魔法陣の存在を示すものです。その抵抗感がなくなれば、魔力を注入できるということです。そうしたら、そのままご自分の魔力を少しずつ流してなじませてください』
（こんな感じか？　……ん、ああ、抵抗がなくなったぞ）
『おお、早いですね。さすがマスターです。それでは、後は満タンになるまで魔力を注ぐだけです。満タンになったら、また抵抗感が強まるので分かるはずです』
（……おお、なるほど。魔力ってやつが何となく分かって来たぞ）
こうして俺は、四か所の魔石に魔力を流し込んでいった。
さすがに最後は魔力切れになりかかって、頭がくらくらしたが、しばらく座り込んで休んでいると、どうにか立って歩けるようになった。

『おめでとうございます、マスター。レベルアップです。しかも2UPですよ』
（よっしゃ。どれどれ……）

＊＊＊

【名　前】トーマ　Lv13
【種　族】人族（転生）
【性　別】♂
【年　齢】10
【体　力】216
【物理力】132
【魔　力】185
【知　力】258
【敏捷性】195
【器用さ】250
【　運　】94
【ギフト】ナビゲーションシステム

【称　号】異世界異能者
【スキル】
〈強化系〉身体強化Lv3　跳躍Lv3
〈攻撃系〉打撃Lv1　刺突Lv3
〈防御系〉物理耐性Lv1　精神耐性Lv3　索敵Lv3
〈その他〉鑑定Lv4　調合Lv1

＊＊＊

おお、ステータスがすべて三十ずつ増えている。
スキルも、〈跳躍〉と〈刺突〉と〈精神耐性〉が一つずつランクアップだ。
このレベルでこの数値は、やはり異常である。ステータスだけなら、レベル30超えの兵士に匹敵するだろう。
しかも、兵士は魔力や知力の伸びは小さいから、魔法を習得すれば、俺はそこらへんの兵士や冒険者に楽に勝てるはずだ。
（実力的にも、旅に出る準備が整って来たな……）
村への道を歩きながら、俺は拳を握るのだった。

5　旅立ち

「これを、お前が？　一人でやったのか？」
自警団の団長のクレイグさんが、四体のオークの死体を見下ろしながら尋ねた。
「はい、そうです」
クレイグさんも他の団員たちも信じられないといった表情だった。
しかし俺の武器である木の棒の先の尖った部分がオークの血で汚れているのと、死体の傷口が全部突き傷であるのを見て信じざるを得なかったようだ。
「魔石は採ったのか？」
「あ、はい、これです」
俺は腰の布袋に入れた四個の魔石を取り出して見せた。
「よし、分かった。じゃあ、お前たち、すまないが解体して肉を取ったら、後は燃やしておいてくれ。それが済んだら帰っていいぞ」
クレイグさんは団員にそう命じると、俺の肩を抱いて少し離れた場所に移動した。
「それで……結界石の魔力が切れていたんで、オークが入り込んだ、ということか？」
「はい、そうです」
「それをお前が魔力を注いで元通りにした、と……」
確かに言われてみると、とうてい十歳の平民の少年ができることではない。クレイグさんが疑ってかかるのも当然だった。
「信じてもらえないかもしれませんが、ウソは言っていません」
「……トーマ、お前がウソを言うようなやつではないことは知っている。だが……お前、どう考えてもオーバースペックじゃないか。どんな秘密を隠している？」
さすがにクレイグさんを丸め込むのは無理なようだ。まあ、近いうちにこの村を出て行く身だ。少しだけ俺の秘密を明かしても害はないだろう。
俺はそう判断して、クレイグさんを見上げた。
「クレイグさん、これから話すことは秘密にしてもらえますか？」
「やっぱり何かあるんだな……分かった。神に誓って約束する」
「ああ、それほど大げさなことじゃないんで、気楽に聞いてください」

俺はそう前置きした後、ナビやスキルのことは伏せて、鑑定ができること、普通の人よりレベル上昇に伴うステータスの上昇率が少しだけ大きいことの二つを明かした。
「……ふむ、なるほどな。つまり、〈鑑定〉スキルでオークのステータスが見えた。そしたら、自分のステータスより低かったので、倒せると判断したわけか？」
「はい、そうです」
「よし、オークの件は理解した。じゃあ結界石の件は、どうやってできたんだ？」
「ああ、それはですね……僕は少しだけ魔力を感じることができるんです。それで、結界石を触ったら、魔法陣の魔力を感じまして、それが弱々しかったので自分の魔力を流してみたら、あら不思議、魔力を注げたというわけでして……偶然ですね」
クレイグさんは眉間を押さえて、ため息を吐いた。
「……あのなあ……はあ……まあ、いいだろう。結界については早急に魔法使いを雇って調べてもらうことにする」
結局、魔法使いを雇うんだったら、余計なことをしない方がよかったな。
そう考えていると――
『そんなことはありませんよ、マスター。魔法使いが来るまでの何日間かに、もし魔物が入り込んだら、被害が出るかもしれませんから』

（ああ、まあ、そうだな……てか、お前、伝えようとしなくても心を読めるのかよ）
『何年の付き合いだと思っているのですか？　マスターのお考えは手に取るように分かりますよ』
（お、おう……だが、それって微妙に嫌なんだが……）
『……ところで、これからどうしますか？』
（話を変えやがったな）
「オークの処理が終わったようだな。よし、では帰るぞ」
俺はクレイグさんの言葉に頷いて、村への帰途に就いた。道すがら、クレイグさんから根掘り葉掘り、俺の他の能力について探りを入れられたが、何とか曖昧にごまかした。
家に帰り着いたのは、昼すぎだった。家族は畑の傍らで一緒に昼食のパンと干し肉を食べている頃だろう。
俺の食事は、たいてい倉庫に置いてあるジャガイモをふかして干し肉と一緒に食べるか、たまに村の雑貨屋で魔石を売り、パンと肉の串焼きを買って食べるかして済ませることが多い。
今日もそうだ。
それからいつもと同じような一日を過ごし……その日の夜、夕食後に俺は、家族を前に「話があ

る」と言って食卓に残ってもらった。
そして、切り出す。
「父さん、母さん、はずれギフトの俺を今まで育ててくれて、ありがとう……」
「「っ!?」」
「な、何だ、急に……」
「そうよ、当たり前のことじゃない。ギフトなんて関係ない、あなたは、私たちの大切な子供なんだから」
俺は深く頭を下げて、感謝の気持ちを表すと、続けて言った。
「ありがとう、とても嬉しいよ……でも、いつまでも甘えるわけにはいかない。本当なら、はずれギフトと分かった時点で、奴隷商に売られていてもおかしくなかった……」
両親は慌てて否定しようとしたが、俺はそれを押しとどめて続けた。
「分かっているよ……父さんと母さんの愛情は、十分に。でも、さっきも言ったように、いつまでも皆に甘えていることは、俺が心苦しいんだ。だから、俺は家を出て一人で生きていこうと思う。もうずっと前からそう決めて、準備もして来たんだ……」
「ちょっと待て、トーマ……」
いつになく強い口調で横から話をさえぎったのは、兄のリュートだった。

「僕は、トーマと一緒に父さんたちを支えていくつもりだった。トーマが食べていく分くらい、僕が頑張るから、出て行くなんて言うなよっ！」
「兄さん……」
俺は立ち上がって、兄さんの所へ行きその肩をしっかりと抱きしめた。兄はいつでも優しくて、いいやつだ。
普通なら、邪魔者が出て行くのだから、表面上はともかく、心の中ではほくそ笑んでいてもおかしくない。しかし、俺の兄貴は本心で俺を引き止めていることが分かる。
本当に、俺にはもったいないくらいできた兄だ。
「ありがとう、兄さん……でも、もうすぐ兄さんは成人する。そしたら、嫁さんをもらうだろう。子供も生まれる」
兄さんが何度も反論しようとするが、俺は続けた。
「ミーナはまだ嫁に行くまで十年近くある。な、分かるだろう？　俺のことなら心配いらない……」
俺はそう言うと、家族を見回しながら、今まで秘密にしていたことと、現在の俺のステータスを打ち明けたのだった。
家族は驚きのあまり、しばらくは口をきけなくなっていた。妹は、事態が呑み込めていない様子でぽかんとしていただけとも言えるが……。

俺の話に両親と兄は半信半疑だったので、俺は〈鑑定〉のスキルで、一人一人のスキルとステータス、そして、ナビにこっそり教えてもらって、それぞれが秘密にしていることを、害がない程度にばらしていくことにした。

「い、いや、待て、マリア、あれは酔った勢いでつい、な……痛ええっ！」

父さんが以前、酒場で友人たちと酒を飲んだ勢いで、ウェイトレスのマーサさんのお尻を触ったことをばらされて、母さんから思い切り腕をつねられた。

でも母さんにも秘密はある。

こっそりへそくりして、行商人から肌が若返るというクリームを買って毎日すり込んでいたが、まったく効果がなくてがっかりしていたことをばらした。

「なっ、ちょ、ちょっとやめてよ、トーマ……」

母さんは男たちから生温かい視線を浴びて身もだえる。

「ぼ、僕はいいよ、何も隠していることなんてないし……」

「うん、そうだね。兄さんが見習いシスターのフィーネに会いたくて、夕方毎日のように教会にお祈りに行くことは、黙っているよ」

「うわああっ、な、何でそんなこと知ってるんだああ！」

「これで、信じてくれた？」

両親と兄さんは、魂が抜けたような表情で頷いた。

「お兄ちゃん、あたしは？」

妹のミーナが、自分だけ仲間外れにされたのを不満そうに頬を膨らませて言った。

「……ああ、ええっと、ミーナは……」

『ミーナさんは、マスターのことが大好きです』

（っ！　……そ、それは嬉しい……って、そんなこと、恥ずかしくて言えるかっ！）

「ええっと……おっ、面白いスキルを獲得してるぞ。これ、何だろう？〈射幸運〉？　読んで字の如くだとすれば幸福を射止める運だけど……運ってスキルなのか？」

「？　……運？　それ、どんなもの？」

「ああ、そうだな……何かよいことが思いがけずやって来る、っていう、とてもいいスキルだぞ」

「わあい、やったあ！」

喜ぶ妹の頭を優しく撫でてやる。

実は、この妹、《治癒師》という貴重なギフトを授かっており、確かに生まれつき強運の持ち主だった。

今は、週に二回、村で唯一の治癒師であるゴゼット婆さんの診療所に、見習い助手として通っている。

結局、家族は、独り立ちするという俺の決意を認めてくれた。ただし、条件として、生活に困ったらすぐに家に帰って来ることを約束させられた。

こうして、俺はそれから五日後、十一歳の誕生日の二か月前に故郷の村を後にして、新たな人生に旅立ったのであった。

6　パルトスの街

故郷のラトス村からほとんど等距離に、タナトスとパルトスという二つの街がある。

東に向かうと隣国ローダス王国に国境を接する砦の街タナトスがあり、西に向かうと王都への道中で最初の街であるパルトスがある。

俺は、一度は王都アウグストを見たかったので、分かれ道を西に向かいパルトスの街を目指した。

辺境の村ラトスからパルトスまでは、順調に歩けば約二週間の距離だ。

で、俺の旅はというと……。

立ち読みサンプル
はここまで

『マスター、左から二匹、来ます』

（おうっ、分かっている。あと、五匹か！　こなくそっ！）

今日も今日とて、道の脇で野宿をしようと、適当な岩場を見つけてたき火をおこした途端、森の方からランドウルフの群れが現れたのだ。

二日前はゴブリンの集団六匹が襲って来たし、その前の日はスライム十数匹が行く手を塞ぐ形で日向ぼっこをしていた。

「はあ～……旅に出てまだ一週間だってのに、もう三回も魔物と戦っているぞ。いったいどういうわけだ？　他のやつらもこんなに頻繁に襲われているのか？」

三十分近くの格闘の末、ようやく八匹の狼の群れを駆逐した俺は、ぐったりと地面に座り込んで愚痴をこぼした。

『いいえ、これは異常なエンカウント率です。さすがマスターですね。異能者の称号は伊達ではありません』

（いやいや、そんな能力、全然嬉しくないから……あ、思い出した。おい、ナビ、あの時の続きを話してもらおうか？）

『どの時でしょうか？』

（ほら、オークを倒す前……神の謝罪とかなんとか言ってただろう？）